

新宿公民館便り

～つどい まなび つなぐ～

濃く色づいている落葉樹は、周りの常緑樹の中にあつて主役のようだ。陽だまりに揺れる落ち葉も心地いい。日本の季節は静かに進み、暦は冬を告げる。このまま静かに、日本中の人々が活動できる日常のままでありたい。

こいそめもみじ
恋染紅葉 ～厳しさを乗り越えて～

11月の誕生色は、秋の残照に映える紅葉の、燃えるような赤。



「もみじ」は、「揉み出す」が変化したものだそうです。色が、もみだされるという意味です。

赤に限らず、黄色に色づく時も使ったようなのですが、やはり、もみじといえば、鮮やかな紅色を思い浮かべますね。

植物分類上では、すべて、カエデ科の植物で、モミジ科の植物というのではないそうです。

夜の冷え込みが厳しくて、日中との寒暖の差が大きければ大きいほど、その紅は、美しく、鮮やかさを増すといえます。

厳しさを乗り越えて、しかもそれを肥やしにすることができる…そんな紅葉のあつぱれさが、人の心を打つのでしょうか。

(山下景子「美人の日本語」より)

主催事業 報告

10月29日(土)大人の木工作

夏休みの小学生向け「わくわく体験」にもお越しいただいた天野先生による、大人の木工作。花瓶入れとミニクリスマスツリーを作りました。



杉の木で作る花瓶入れは、接着剤がはみ出ないように丁寧に塗り、しっかり固めることがポイント。そしてサンドペーパーで磨いた後に、ワックスを薄く数回塗り込むこと。色合いの変化を楽しむことができます。



桧で作るクリスマスツリーは、香りを楽しむために



令和4年度 第16号
令和4年11月7(月)
発行 千葉市新宿公民館
住所 中央区新宿 2-16-14
電話 043-243-4343

ワックスは塗りません。穴を空ける際の穴の間隔や、のこぎりで木を切る際の角度に気を付けたりして、道具を使う楽しみも経験されたようでした。

同じようで、どこか少し違って、木の香りやぬくもりを感じることができる講座となりました。



アンケートから一部を紹介します。

・とても良かったです。早速、家で飾りたいと思います。・材料がキットなので不器用でもなんとか完成させることができました。限られた時間内であわてることも多いですが無事に出来上がった時はうれしかったです。・木工作の講座に初めて参加しました。2時間半の間に皆さんと同じようにできるかと思いましたが、先生の丁寧な指導で作品を完成することができました。杉の花器に桧のクリスマスツリーは暮らしに華を添えます。・とても丁寧に教えていただき良かったです。木の香りで癒されました。次回があったらまた参加させていただきます。・初めての公民館デビューの講座でした。本当に楽しく有意義な時間を過ごすことができました。・久しぶりに工作をして大変満足しました。童心になって時間を過ごしました。

第16回新宿公民館文化祭

3年ぶりの公民館文化祭の開催となりました。毎日報道される新規感染者数の増減に、クラブ連絡会役員の皆様には実施判断は難しかったことと思います。そのような期間での開催となりましたが、大変多くの方に参観していただき、大変うれし

く、また楽しませていただきました。開催、おめでとうございます。

この2年半ほどの間に、サークルの活動を自粛したり、また高齢化のために解散されたりしたところもありました。人数が集まらなかったり、活動回数を減らしたりして続けてきたサークルもあったことでしょう。それでも、できる活動を続けて、できる範囲での発表は大いに意義があることだと思います。今年は参加できなかったサークルも、次は参加できるようにすることを期待したいです。

クラブ役員や実行委員の中にも、文化祭は今回初めての経験だった方もいらっしゃったでしょう。様々な場面で初めてだったことから、何かと戸惑いご苦労されたと思います。運営に当たって漏れていたことや、もっと配慮すべきだったこと、もっと工夫できたことなど反省点はあるでしょう。でも、今年開催できたことのほうが、私は意味があったと思っています。開会式でも申し上げましたが、2年、3年と実施できない(実施しない)期間が続くと、公民館が有している一つの意義が忘れられていくように思います。“単なる部屋貸し”ではなく、地域やサークルをつなぐコミュニティのために、人と人をつなぐために、人と人が集うために、文化祭は大切な空間であると思っています。

今回、皆さんが時間をかけて真剣に、活動、制作、稽古、練習している姿に引き込まれ、手拍子をし、体を動かしながら、大変楽しく参観させていただきました。ありがとうございました。

今は来年の文化祭の開催を楽しみにさせられています。クラブ連絡会役員の皆様、実行委員の皆様、参加されました皆様、本当にご苦労様でした。

当日の一部を掲載します。他にも撮りました写真は、後日、館内に掲示したいと思います。どうぞお楽しみにご覧ください。



季節の日本語

きもりがき 木守柿 ~天への捧げもの~

柿は、収穫するとき、すべてをとってしまわないで、木の先端の方に少しだけ残しておく風習があります。地方によって、残す数はひとつだけだったり、数個だったりするようですが、日本各地に残る風習のようです。

理由も鳥にあげるため、来年の豊作を祈るため、神(自然)に捧げるためなど、さまざまです。

残された柿が、直接、木を守っているわけではないようですが、それでも、鮮やかに熟した柿が、葉もまばらな木の先端で、秋風に吹かれているのを見ると、最後までふんばってその木を守っているように見えます。鳥への思いやりが、長い目で見れば連鎖で自然を潤すことになるのでしょう。

木守柿を残しながら、人もまた、自然を守ろうとしてきたのですね。

(山下景子「美人の日本語」より)

陽だまりに 面目躍如 文化祭
立冬に 寒さと8波 身構える

・・・マスクして、コート着て・・・

(新宿公民館 館長 迎 浩二)

